

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## ウインドトーカーズ

2002 (平成14) 年8月30日鑑賞

Data

監督: ジョン・ウー

出演: ニコラス・ケイジ/アダム・

ビーチ/ロジャー・ウィリー

/クリスチャン・スレーター

### 👁️👁️ みどころ

香港出身のジョン・ウー監督が描く戦争映画。舞台はサイパン島の攻防戦。迫力満点の戦闘シーンはすざまじいが、この映画は、アメリカインディアンのナバホ族の言語を基礎にしたコード・トーカーズ（暗号通信兵）とそれを「護衛」する海兵隊員が主人公。戦闘の最前線に立って、攻撃地点を暗号で伝える通信兵とこれを護衛し、捕虜になりそうになればこれを射殺すべき任務を背負った主人公ニコラス・ケイジの人間像は興味深い。ハリウッド製スーパーヒーローが登場するアメリカ讃歌の戦争映画とは一味違った戦争大作。一見の価値あり。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <ナバホ語を基本とした暗号>

最近『エネミー・ライン』、『ブラックホーク・ダウン』、『ワンス&フォーエバー』などアメリカ・ハリウッド発の戦争映画が多い。そしてそのほとんどが、ヒーローは精神的にも肉体的にも強靱で、任務遂行のためには自己犠牲をいとわず、家族愛や友情にも富み、数々の困難をかいくぐりながら最後には目的を達成しアメリカの正義を実現するというストーリーである。しかしこの映画は、主演はハリウッドスターのニコラス・ケイジだが、中国生まれで香港育ちの監督ジョン・ウーが、太平洋戦争はサイパン島の攻防戦において、暗号通信兵として活躍したナバホ族とそれを護衛する海兵隊員をとりあげた作品だということに興味をもった。

#### <コード・トーカーズとは>

ナバホ族とはアメリカ大陸の先住インディアン。「アメリカ西部劇」でおなじみのアパッ

チ族などと同じように、先住インディアンは白人によって征服され、今は「居留地」に保護される立場となっている。そのナバホ族の言語を、アメリカ軍は太平洋戦争において暗号として使用することになった。そしてナバホ族の若者ベン・ヤージー（アダム・ビーチ）とチャーリー・ホワイトホース（ロジャー・ウィリー）は、通信兵としてアメリカ海兵隊と共に第一線の激戦地サイパン島に向かった。

暗号通信兵のことを「コード・トーカーズ」という。コード・トーカーズの任務は偵察隊の一員として戦場の最前線へ赴き、銃弾飛び交う中で、味方にピンポイント砲撃の地点を暗号で知らせること。

そしてウインドトーカーズとはこの通信兵を護衛する兵士のことだ。

ニコラス・ケイジ演ずる海兵隊員ジョー・エンダーズの任務は、コード・トーカーズのヤージーを護衛することだ。そして万一暗号兵が敵（日本軍）に捕虜にされそうになった時は、拷問による暗号解読の危険をとり除くため、その暗号兵を「殺すこと」だ。

戦争映画でのこういう設定は極めてめずらしい。しかも何とこれは実話であり、ナバホ語を基本とした暗号は最後まで日本軍に解読されなかったとのことだ。

### <前線への復帰を願うエンダーズ>

冒頭の、ヤージーたちがナバホ族に見送られて出発するシーンの後、たちまち密林の中でのアメリカ海兵隊と日本軍の激突シーンが展開する。そして応援を絶たれながら、現地を死守せよとの命令に忠実に動いたエンダーズは部隊を全滅させてしまった。自らも耳を大きく負傷したうえ、死んでいった戦友たちの声に悩まされながら、しかしなおエンダーズは第一線への復帰を願った。

彼はイタリア系の移民で、家族もなく、平時には必ずしも善良な市民ではない。したがって当然アメリカ合衆国に忠誠を誓い、勲章欲しさに海兵隊づとめをしているわけではない。しかしなぜか彼の戦闘意欲は旺盛だ。これは単なる彼の向こう意気の強い気性によるものか、それとも戦友を殺され、「日本軍憎し」の感情によるものか、そこらあたりは多少不明で不満が残る。

そんなエンダーズに与えられた任務は、前述のとおり、コード・トーカーズ（暗号通信兵）のヤージーと2人1組となって行動し、ヤージーを護衛すること。最前線にもどって日本兵をいっぱいやっつけたいエンダーズは当然不満タラタラだ。話しかけてくるヤージーと交流しようとしてもしない。

### <とにかくすごい戦闘シーン、しかし・・・>

いよいよサイパン島への上陸作戦だ。アメリカ側から言えば、1942年8月のガダルカナルの攻防戦に続いて「待ってました！」という1944年7月のサイパン島上陸作戦。

しかし日本側の目で見れば、この時期には既に太平洋戦争は後期に入り、日本軍の敗色が次第に濃くなっていった。そして後になって「玉砕」という言葉で表現された日本軍の敗北は、サイパン島の後、硫黄島の悲劇や沖縄の悲劇につながっていったものだ。

私が小さい頃、親せきの集まりの中で大人の人から聞いた「南方戦線」の悲惨さをつい思い出さずにはいられない。

しかしスクリーンは、そんな私の「思い」などお構いなしに、容赦なく弾丸が飛び交う。その迫力は凄まじい。ジョン・ウー監督の「腕の見せどころ」でもあることはたしか。しかし、艦砲射撃の威力などは「かくありなん」と納得できるものの、第一線での突撃や白兵戦で、本当にあんなにたくさんの銃弾が飛び交ったのだろうか？ベトナム戦争の時代なら、武器は太平洋戦争の時代と比べ格段に進歩しているうえ、アメリカとソ連の代理戦争のようなものだったから、ベトナム側も豊富な武器と火力をもっていただろうが、サイパン島の日本軍はこんなに豊富な火力をもっていたのだろうか？

ものすごい速さでマシンガンから銃弾が飛び交う、こんなに迫力ある戦闘シーンの連続は、ひょっとして映画の世界だけのものではないだろうか？

むしろ、少し冷めてそんな風に思えてしまうほど、凄まじい戦闘シーンだ。

そして、映画だから仕方ないし、いつものことだが、どんなに弾丸がとんできても、なぜかエンダーズやヤージーにはあたらない。これに対してエンダーズやヤージーが撃ったマシンガンで殺した日本兵は一体何十人、何百人にのぼるだろうか……。

## ＜「日本軍」の描き方は『パール・ハーバー』よりずっとマシ＞

日本軍はあくまで「殺される側」におかれている。これは歴史上の事実だからやむをえない。しかしよくまあこれだけ次々と殺されることだとため息が出てしまう。もっともその日本軍の描き方は、『パール・ハーバー』（2001年作品）で見せられた「ずさんさ」に比べれば、格段にきっちりしている。

もちろん、それがどこまで正確なのかは私にはわからないが、軍服や鉄カブトそして首を切り落とす軍刀などの装いはもっともらしい。そして日本軍のゲリラ的な闘い方もこんな風だったのかと一応は思わせてくれる。

しかしやっぱり、殺されるだけの役割をじっと見ているのはつらい……。

## ＜二人はなぜこんなに闘ったのか＞

エンダーズは、その働きを見れば海兵隊員のカガミのようなもの。そしてヤージーも通信兵としてのみならず、エンダーズが自らヤージーの親友のコード・トーカーズであるホワイトホースを殺したことを知り、多少ヤケ気味になった後半では、海兵隊員顔負けの「勇氣」で戦闘をくり広げ、日本兵をバツバツとなぎ倒して最前線に至る。そして、味方

の海兵隊が狙い撃ちにされている日本軍の大砲の位置を暗号で知らせ、飛行機による爆撃を要請。これによってついにサイパン島の制圧が成った。

そして英雄的な働きをしたエンダーズは死亡。

傷ついたヤージーは、その後ナバホ族の居留地に戻り、自分の息子にエンダーズのことを「友」と呼ぶように語った。

前述のように、エンダーズはイタリア系の移民で、アメリカ合衆国から特別の恩恵を受けていない。そしてヤージーに至っては、白人からの迫害の思い出はありこそすれ、「いい目」は何も受けていない筈だ。

ナバホ族のコード・トーカーズの数十名が現実には太平洋戦争において大きな役割を果たしたことは歴史的事実だとしても、それが果たしてこの映画のような献身的なものだったのかどうかは私には疑問が残る。要するに、この映画を観ても彼らがなぜこれほどまで献身的に、アメリカのために闘うのかが十分に理解できないわけだ。

ジョン・ウー監督には、そこらあたりをもう少し突っこんでほしかったと思う。

しかし、サイパン島でのアメリカ軍と日本軍の激闘をコード・トーカーズ（暗号通信兵）を通じて描いたのは非常に面白い切り口であるうえ、それなりに充実した内容であることは間違いない。一見の価値あることはたしか。

2002（平成14）年9月4日記